

平成 29 年度（第 61 回）

岩手県教育研究発表会 発表資料

外国語活動・外国語分科会

スモールステップの積み重ねで達成感のある授業を目指して  
～生徒を信じて「できる」と実感させて本気にさせる授業プラン～

平成 30 年 2 月 9 日  
県高等学校教育研究会（英語部会）  
岩手県立大槌高等学校  
鈴木 紗 季

<目 次>

I	研究目的	1
II	研究内容与方法	1
1	研究の目標	1
2	研究の内容与方法（指導計画）	1
III	学習の展開と考察	1
1	ポスターセッション	1
2	英語ディベート	7
3	新聞スクラップ	12
4	ピクチャーカードを用いたスピーキングとライティングを連動させた表現活動	14
IV	研究のまとめ	15
1	研究の成果	15
2	今後の課題	16

## I 研究目的

英語に苦手意識がある生徒や基礎・基本の定着が不十分な生徒が意欲的かつ積極的に参加できるアクティビティを取り入れることにより、コミュニケーション活動を数多く経験することを通して、生徒自らが主体的に英語学習に臨む姿勢を育む。

## II 研究内容と方法

### 1 研究の目標

- (1) 様々なアクティビティを通して、英語学習に主体的に取り組む生徒の育成を図る指導の在り方について明らかにする。
- (2) 積極的にコミュニケーション活動に参加する生徒の育成を図る指導の在り方を明らかにする。

### 2 研究の内容と方法（指導計画）

#### (1) 2015年度

教科担任を受け持つ2年次の生徒を対象に、後期で「ポスターセッション」を行う。

#### (2) 2016年度

教科担任を受け持つ3年次の生徒（進級した①の生徒）を対象に、前期で英字新聞の作成、後期で「英語ディベート」を行う。

#### (3) 2017年度

教科担任を受け持つ3年次の生徒（1年次より持ち上がりの所属学年のクラス）を対象に、「ピクチャーカードを用いたスピーキング能力、ライティング能力の向上を図る活動」を通年で行う。また、後期にはKP法を用いたプレゼンテーションを行う。

#### (4) 2015～2016年度

上記①、②の生徒を対象に、「新聞スクラップリレー活動」を毎週行う。

## III 学習の展開と考察

以下に挙げる4つのアクティビティが、生徒の学習意欲を高める指導方法であるかを検証するとともに、4技能の関連性や指導と評価の一体化の在り方、観点別評価の在り方等についても考察する。

### 1 ポスターセッション

対象は2015年度の2年次の生徒で後期に行った。トピックは修学旅行で行った。自主研修の4人1グループで発表をしてもらった。話し手、聞き手のマナーやルールを学ぶとともに、質疑応答まで行う活動とした。この活動を行う上で、事前にCan-Doリスト、Rubricの確認を生徒に対して行い、目標を明確にした。当日までの指導の流れを含む指導案は以下のとおりである。

- 1 日時 平成27年12月11日(金) 5校時
- 2 実施場所 第4学習室
- 3 クラス 文理コース 第2学年C組(男子8名、女子24名 合計32名)
- 4 使用教材 作成したポスター、原稿他
- 5 単元名 ポスターセッション

### Our recommendations for visiting Kyoto

#### 6 単元について

##### (1) 教材観

2年次に進級し、4月から様々な言語活動に取り組んできた。最初は身近なテーマについての small talk に始まり、教科書の内容を用いた story retelling などに継続的に取り組むなど非常に高い意欲を持って参加してきた。また、幸い英語表現Ⅱも担当していることから連動性を取りやすく、コミュニケーション英語Ⅱでは4技能+「考える」を、英語表現Ⅱでは書くこと・話すことを中心に行ってきた。今回のポスターセッションは、その out put 活動のまとめという位置づけである。 テーマは修学旅行ということで、見聞きした情報や、自らの経験を自分の英語で表現するとともに、質疑応答を通して、情報収集の能力やコミュニケーション能力の伸長も図りたい。 また、緊張に打ち勝ち、意欲的に話す姿勢を期待したい。

##### (2) 生徒観

今年度、4月より授業を担当しているクラスである。ペアでもグループでも考えをシェアし、言語活動に意欲的に取り組む生徒が多い。4月から様々な言語活動を続ける中、半年経ち、振り返りアンケートを見てみると、38%の生徒が Reading の力が伸びたと感じており、41%の生徒が Writing の力、Speaking の力が伸びたと感じている。Can-Do リストを見ながら活動し褒めることで、目標に近づいていることを実感できるように意識をしている。これまでの活動内容は以下の通りである。

4月～5月： 1 minute talk を継続的に行った。4月当初は1分間、話が續かない状態であったが次第に長く話せるようになった。

5月～7月： describing pictures 活動を行った。毎時間ランダムに配布されるカードについて、写真+文法事項(例：写真の出来事を過去形の文章を5文以上用いて説明する)で説明したり、写真+機能(例：写真にある出来事に友人を誘う)を設定し絵の説明をペアで行ったり、書いたりする活動を行った。1分を超えて話を続ける生徒もでてきた。ここで、Can-Do リストを確認し、2分まであと半分だという励ましと、内容や文章の繋がりも大切にしたいという話をし、目標を確認した。この活動は prepared も impromptu でも行った。

9月～10月： チェーンストーリー活動、および質問文作成活動を行った。論理的な話の展開、ディスコースマーカ―等にも意識を向けて活動を行った。また、スピーチや show & Tell の原稿の流れの確認等も行った。

11月～12月： 9、10月の活動を踏まえてポスターセッションを行うために、相手に伝わる話し方などの delivery も意識できるように指導した。Rubric に基づき、B段階評価のモデルを提示した。宮古高校さんでポスターセッションに参加させていただいた時のポスターを生徒達に見せて、ポスターの構成や見せ方について共有した。

このような活動に非常に積極的に取り組んできた。苦戦しながらもなんとか英語で相手に伝えようという姿勢が多く見られた。このような姿勢を大いに伸ばしてあげたい。

## (2) 指導観

ポスターセッションにおいて、相手に通じる英語を使う能力（Big word の羅列を避ける、和英辞典に頼り切らない、自分のボキャブラリーで話す等）、相手の意見を聞き取り理解する能力（～right? と聞き返す等）などポスターセッションがきちんと成立するには、4技能がバランス良く高まっている必要がある。プレゼンする原稿を書く活動、読む・話す活動においては、概ねよくできる。今回は4月から継続してきたアウトプット活動をベースに与えられたテーマの元、見聞きした情報や自らの経験を説明や描写の工夫をして聞き手に効果的に伝えるように話したり書いたりすることを通して、まずはブロークンでも相手に伝える、わかろうとする態度を養いながら、英語の読み書きにおける正確性も高めていきたい。また、今後の展望として、今回の活動を発展させ、新聞スクラップ活動などを取り入れながら、ディベートやディスカッションにつなげたい。また、ポスターについても、次回はパソコンで英文をタイプする形式に持っていく予定である。

7 単元の目標 (●は本時の評価項目)

	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
聞くこと	○相手の言いたいことを理解しようという姿勢で（聞き取れない語や道の語があっても、推測するなどして）聞こうとしている。		○出来事や物事についての説明を聞いて、キーワードなどを手がかりにして概要を理解することができる。	○話し手の意図や気持ちを表すリズムやイントネーションの違いを理解している。
読むこと	○理解できない語や未知の語句があっても、推測するなどして読み続けている。	○聞き手の反応や、伝えたい内容に応じた適切な速度や声の大きさを原稿を読むことができる。	○説明などを読んで、全体の概要を理解することができる。	○単語の発音、リズム、イントネーションなどの音声的な特徴を理解している。
話すこと	●自分が経験したこと、見聞きした情報を、間違えることを恐れずに積極的に話そうとしている。	●情報や説明などについて、互いに質問をしたり、質問に答えたりすることができる。		○質疑応答や意見交換を円滑に行うために必要な表現や方法についての知識を身につけている。
書くこと	○読み手が理解しやすくなるように、書いたり書き直したりし、意欲的に説明文章を書こうとしている。	○聞いたり読んだりした内容を、自分の経験を盛り込みながら、まとめて書くことができる。		○相手に伝わりやすいように、正しい語順や語法を用いて分を構成する知識を身につけている。

8 指導計画（全13時間（うち英語表現Ⅱが3時間）：本時 第10時

第1時 グループ内役割分担、発表内容の検討、ポスターセッションの方法の確認

Can-Do の共有、rubric の共有、B段階モデルの提示

第2時 各グループ原稿作り（英語表現Ⅱ）

第3時 各グループ原稿作り

第4時 ポスター作成、原稿加筆訂正（英語表現Ⅱ）

第5時 ポスター作成、原稿加筆訂正

第6時 ポスター作成、原稿加筆訂正

第7時 発表原稿練習、質問事項練習

第8時 発表原稿練習、質問事項練習（英語表現Ⅱ）

第9時 ポスターセッション 第一グループ発表

第10時 ポスターセッション 第二グループ発表

第11時 自己評価とまとめ（改善点や工夫の確認）

第12、13時 ビデオ収録と振り返り

9 本時の指導

(1) 目標

- ① 自分の経験や、見聞きしたことを積極的に話すことができる。
- ② プレゼンテーションを聞いて質疑応答ができる。

(2) 本時の評価規準

評価規準	概ね満足と判断される状況 (B)	Bのうち十分満足できると判断される状況 (A)	努力を要する生徒への指導の手立て (C)
①自分の経験や、見聞きしたことを積極的に話そうとしている。	つまづくことはあっても、何とか自分の使える英語でプレゼンテーションができる。	話すスピードなどのdeliveryにも留意し、原稿を見なくても内容をしっかりと伝えることができる。	グループ内でサポートし合うように促す。
②プレゼンテーションを聞いて質疑応答ができる。	紹介された内容についてつまづくことや間違いがあっても質問を投げかけることができ、また質問に対して自分の考えで応答することができる。	紹介された内容について適切な疑問文の形で質問を投げかけることができ、また質問に対して自分の考えで応答することができる。	グループ内でサポートし合うように促す。

10 本時の展開 (Teaching Procedure)

過程	指導内容	学習活動	指導上の留意点 評価の観点・方法
導入 (3分)	1)目標の共有 2)グループで原稿または質疑の読み合わせと確認	発表者:グループ内で原稿を読み、必要であれば原稿に加筆訂正する 聞き手:グループ内で質問文とrubricの確認をする	グループで読み合わせをしているか (活動の観察)
展開 (45分)	<セッション1> 【10分】 プレゼンテーション (8分)  質疑応答 (2分)	1グループ4人 【発表者】 4人すべてが2分間プレゼンをする。 (2分×4人=8分) 【聞き手】 発表者に質問をする。 発表者はそれに答える。 *グループのリーダーは質問をした生徒のプリントにシールを貼る。	本時の評価規準①          本時の評価規準②

展開 (45分)	移動(1分) <セッション2> <セッション3> <セッション4>		
終末 (2分)	・自己評価の記入 ・ゴールの確認		

11 参考文献

足立聿宏・Raymond D. Sweat (2012) 『伝わる！国際派必須の英語スピーチ』大阪教育図書。  
 本多敏幸ほか (2008) 『中学校・高校 英語 段階的スピーキング活動42』三省堂。  
 松本茂ほか (1999) 『生徒を変えるコミュニケーション活動』(英語授業ライブラリー④) 教育出版。  
 齋藤栄二 (2015) 『「英語で授業」ここがポイント』(英語教育 21世紀叢書) 大修館書店。

★宮古高校で参加させていただいたポスターセッション

12 準備した物品

ストップウォッチ/タイマー	16個
ポインター	4本
カラーペン	6セット
模造紙	8枚
ボード	32枚
シール	8枚
京都に関する本	10冊

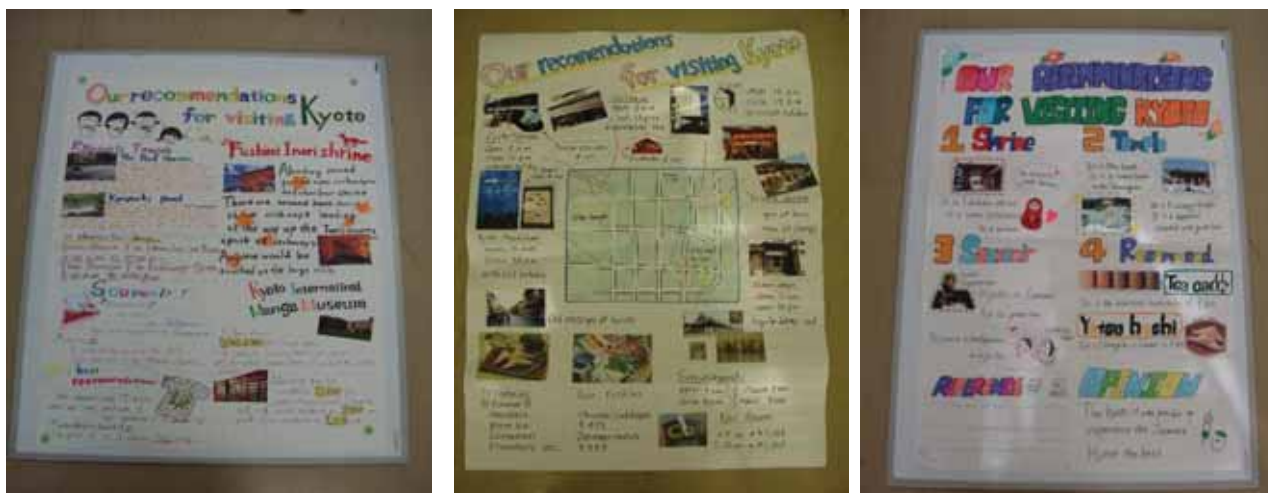
英語表現		達成度
学習者		
スピーチの準備	外国語を通じて、英語や文化に対する理解を深め、自ら積極的にコミュニケーションを誘う力や努力を生産。また、卒業後も英語に高い関心を維持し、学び続けることができる生徒。	達成度
基礎的知識の習得	1年までに、音読した英語の基本的な事項を理解し、4技能に関連づいて単語や構文の理解を深めることができる。教科書試験による到達目安：英語3級程度～準2級程度	
Listening	正しい日本語での説明や説明(指示)を理解することができる。	
	英語で読まれる程度の音読の内容や読まれる英文の内容や内容を聞き取ることができる。	★
	英語で読まれる程度の内容の理解や指示を聞き取り、反応することができる。	
Speaking	自分の考えや感情を説明し、内容に関して自分の考えを述べることができる。	
	200ワード程度のスピーチを準備し、プレゼンテーションの要領を説明しながら、200ワード程度の比較的平易な英文の文の内容を説明することができる。	
	授業やイベントセッションを管理して資料書の本文を読み取りに目立たないように管理することができる。	
Reading	授業で学んだ内容について説明を聞いて聞き取り、日本語で説明する簡単な英語を話すことができる。	
	予めよまされた読書について読み取り、その中でよまされた読書に対して要約的な英語で説明することができる。★100ワード以上、Speakerに対しては200ワード以上説明することができる。★授業の課題で、200ワード以上説明することができる。	★
	英語で相手の質問や働きかけに適切に反応することができる。	
Writing	興味・関心のあることについて英語の英文を準備し、自分の説明や指示の要領に、また自分の英文を書くことができる。★100ワード以上	
	授業で学んだ内容を聞いてよめられたテーマについて英語の英文を準備し、自分の英文を書くことができる。★100ワード以上	
	英語の指導要領を管理して簡単な英文を書くことができる。	
英語表現	1700ワード以上の英語の要領や要約を準備し、活用することができる。	
英語表現	1年までに予んだ英文の知識や理解を説明し、必要に応じて活用できる。	

		4	3	2	1
A	Speaks clearly	プレゼンテーションの間、全体で(100-95%)ははっきりとわかりやすく話し、発音の間違いが全くない状態で発表できる。	プレゼンテーションの間、全体で(100-95%)ははっきりとわかりやすく話しているが、発音の間違いが数カ所あったが、発表できる。	プレゼンテーションのほぼ全体(94-85%)でははっきりとわかりやすく話しているが、発音の間違いがある。	しばしば口ごもったり、聞き取りが難しくなっている。また複数の発音の間違いがある。
B	Posture & Eye contact	姿勢よく立っており、自信があり、余裕が感じられる。話している間、聞き手(前座)の中の全員とアイコンタクトをとることができる。	姿勢よく立っており、話している間、聞き手(前座)の全員とアイコンタクトをとることができる。	プレゼンテーションの間、時に姿勢良く立っており、アイコンタクトを時々とることができる。	姿勢が悪く、話している間、人々の顔をみていない。
C	Topic & Content	紹介しているトピックについてとても興味を持っていて熱意が大変感じられる。	紹介しているトピックに興味をもって、熱意が感じられる。	紹介しているトピックにあまり興味関心が感じられない。	何も紹介できていない。

Rubric

Can-Do リスト





ポスターセッションで使用したポスター

## 2 英語ディベート

対象は 2016 年度 3 年次の生徒で後期の活動として行った。トピックは宿題の是非について行った。ディベートにつながるようにスモールステップを意識した活動を繰り返し行った。例として、ディベートの流れはもちろん、各ポジションの役割や、各役割における発表のひな型、使用される語句の確認や、資料整理やエビデンス集めなども細かく段階的に導入した。また、AFF（肯定側）と NEG（否定側）のどちらの立場からも原稿を考えることでアタック（反駁）スピーカーがスムーズにアタックできるようにした。この活動を行う上でも、事前に Can-Do リスト、Rubric の確認を生徒に対して行い、目標を明確にした。当日までの指導の流れを含む指導案は以下のとおりである。

英語科 英語表現Ⅱ 学習指導案			指導者 鈴木 紗季
1 日時	平成 29 年 1 月 31 日（火）	5 校時	
2 実施場所	視聴覚室		
3 クラス	文理コース 第 2 学年 C 組（男子 8 名、女子 24 名 合計 32 名）		
4 使用教材	プリント		
5 単元名	英語ディベート High schools should ban homework.		
6 単元について			
(1) 教材観			
	3 年次に進級し、前期は新聞を使った活動、後期は英語ディベートに向けた活動を行ってきた。最初は身近なテーマについての意見交換に始まり、段階的にデータの必要な論題に移行してきた。ディベートを通して、4 技能+「考える」という能力を伸ばすような活動に取り組んで来た。1 つの論題について相手の意見を聞いて、自分が賛成反対の意見を述べる際も、理由や根拠の必要性を考え、また、自分と反対の意見を聞くことで、物事を多角的な面から考察し、その論題について考えを深めることに重点を置いた。今回の論題は、「高等学校は宿題を禁止		

すべきである」。授業では、携帯電話の是非や、夏休みの課題の是非等、様々な論題で活動をしたが、最後は生徒の身近なテーマにした。Attack には非常に苦戦をしているが、緊張に打ち勝ち、自分たちの考えに根拠を持って意欲的に話す姿勢を期待したい。

## (2) 生徒観

英語の既習事項の定着度にはばらつきがあるものの、言語活動に意欲的に取り組む生徒が多い。前期では、主に「書く」ことに焦点をあて、新聞を用いたスクラップを継続的に行い、英字新聞を作成した。このときにも、懸命に取り組んでくれた生徒たちである。学習指導要領を鑑みて、英字新聞は PC でタイプして作成した。後期は、4月に予告していたとおりディベートに取り組んできた。今年のポスターセッションとは異なり、原稿ありきではないため、相手の言うことを一度で聞いて、反応するという即興性が求められる中、苦戦しながらも活動に参加してきた。生徒間で得意不得意の差はあるものの、声を掛け合って協力しながら進める場面も見られた。意欲的かつ積極的に取り組んでくれている姿勢が多く見られた。このような姿勢を大いに伸ばしてあげたい。

## (3) 指導観

ディベートにおいて、相手に通じる英語を使う能力、相手の意見を聞き取り理解する能力などディベートがしっかりと成立するには、4技能がバランス良く高まっている必要がある。立論や反駁を書く活動、読む活動においては、概ねよくできる。しかし、準備した立論を読み上げる活動はともかく、聞いた内容についての反駁を限られた時間に考え、即興で話すことは非常にレベルの高い活動である。しかし、段階的に繰り返し取り組むことで、緩やかではあるが、確実にその力を付けている。まずは、ブロークンでも相手に伝える、わかろうとする態度を養いながら、正確性も高めていきたい。

## 7 単元の目標（●は本時の評価項目）

	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	言語や文化についての知識・理解
聞くこと	○相手の言いたいことを理解しようという姿勢で（聞き取れない語や道の語があっても、推測するなどして）聞こうとしている。	/	○話し手の意図や気持ちを表すリズムやイントネーションの違いを理解している。
読むこと	○自分のチームの意見や、相手の反対意見を読む活動に積極的に参加している		○聞き手の反応や、伝えたい内容に応じた適切な速度や声の大ききさで原稿を読むことができる。

話すこと	●原稿やフローを元に、相手に伝わる工夫をしながら、自分の立論・反駁を話そうとしている。	○データなどを用いて、自分の考えを根拠とともに伝えることができる。	○質疑応答や意見交換を円滑に行うために必要な表現や方法についての知識を身につけている。
書くこと	○自分の立論・反駁が相手に伝わるように、語彙を選択しながら、意欲的に書こうとしている。	●自分の意見と相手の意見をまとめて書くことができる。	○相手に伝わりやすいように、正しい語順や語法を用いて分を構成する知識を身につけている。

8 指導計画（全 22 時間：本時 第 22 時）

- 第 1 時 Can-Do の共有、ディベートの概要説明
- 第 2 時 ディベートの説明、役割分担（席は毎回変わる）
- 第 3 時 ディベートの概要（AD・DA について）
- 第 4 時 チェーンレター形式で AD・DA の考察
- 第 5 時 立論の立て方について①
- 第 6 時 立論の立て方について②
- 第 7 時 立論作成（AFF①－1）
- 第 8 時 立論作成（AFF①－2）
- 第 9 時 立論作成（AFF②－1）
- 第 10 時 立論作成（AFF②－2）・・・・・・・・・・ここまでが後期中間
- 第 11 時 立論作成（NEG①－1）
- 第 12 時 立論作成（NEG①－2）
- 第 13 時 グループ決め、各チーム立論作成
- 第 14 時 Cross-Examination の練習、Flow の取り方
- 第 15 時 Cross-Examination の練習、Flow の取り方
- 第 16 時 立論を聞く、Flow を取る、反駁（Attack）の練習①
- 第 17 時 立論を聞く、Flow を取る、反駁（Attack）の練習②
- 第 18 時 資料の共有（※岩手日報に協力していただく：NIE）
- 第 19 時 反駁（Attack）を聞く、Flow を取る、反駁（Defense）の練習①
- 第 20 時 反駁（Attack）を聞く、Flow を取る、反駁（Defense）の練習②
- 第 21 時 反駁（Attack、Defense）の練習
- 第 22 時 本時：全て通した英語ディベート

## 9 本時の指導

### (1) 目標

- ① 相手に伝わる工夫をしながら、自分の立論・反駁を話すことができる。
- ② 自分の意見と相手の意見をまとめて書くことができる。

### (2) 本時の評価規準

評価規準	概ね満足と判断される状況 (B)	Bのうち十分満足できると判断される状況 (A)	努力を要する生徒への指導の手立て (C)
①原稿やフローを元に相手に伝わる工夫をしながら、自分の立論・反駁を話そうとしている。	つまづくことはあっても、何とか自分の使える英語で、自分の意見を伝えることができる。	話すスピードに留意し、内容や構成がしっかりした論理的な文章で伝えることができる。	グループ内でサポートし合うように促す。
②自分の意見と相手の意見をまとめて書くことができる。	フローを参考に、自分と相手の双方の意見を取り入れ、自分の論の正しさをまとめることができる。	フローを参考に、自分と相手の双方の意見を取り入れ、論理的な文章で自分の論の正しさをまとめることができる。	フローのメモを文章につなげられるように支援する。

## 10 本時の展開( Teaching Procedure )

過程	指導内容	学習活動	指導上の留意点 評価の観点・方法
導入 (3分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標の共有</li> <li>・グループで立論の読み合わせと確認</li> </ul>	グループ内で立論を読み合い、原稿に加筆訂正する	グループで読み合わせをしているか (活動の観察)
展開 (46分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・賛成・反対に分かれてディベートを行う</li> </ul>	①賛成側立論 (4分) 準備時間 (2分) ②質疑応答 (2分) ③反対側立論 (4分) 準備時間 (2分) ④質疑応答 (2分) 準備時間 (4分) ⑤反対側反駁1 (2分) ⑥質疑応答 (2分) ⑦賛成側反駁1 (2分) ⑧質疑応答 (2分) 準備時間 (4分)	本時の評価規準①

展開 (46分)	・ Summary を作成する。	⑨賛成側反駁2 (2分) ⑩反対側反駁2 (2分) 自分のチームの意見、相手の反対意見を踏まえて、文章でまとめる。(10分)	本時の評価規準②
終末 (1分)	・ 自己評価の記入 ・ ゴールの確認		

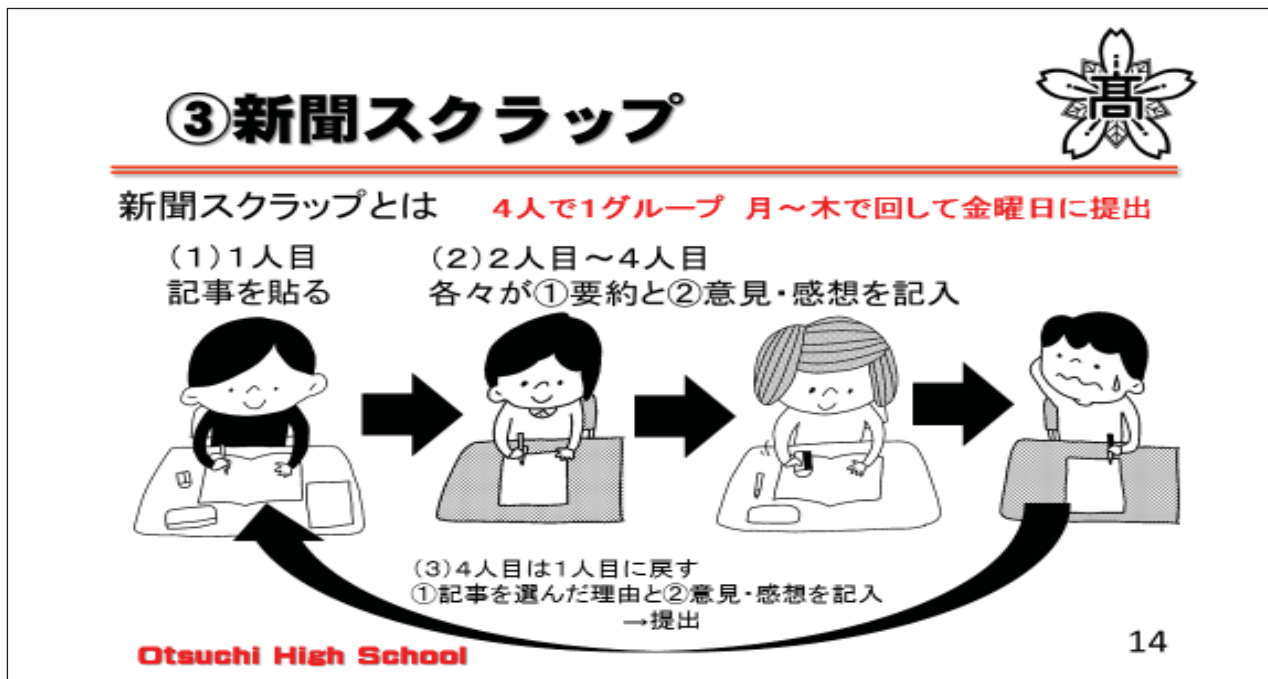
## 11 参考文献

- 足立聿宏・Raymond D. Sweat (2012) 『伝わる！国際派必須の英語スピーチ』大阪教育図書。  
 本多敏幸ほか (2008) 『中学校・高校 英語 段階的スピーキング活動42』三省堂。  
 松本茂ほか (1999) 『生徒を変えるコミュニケーション活動』(英語授業ライブラリー④) 教育出版。  
 齋藤栄二 (2015) 『「英語で授業」 ここがポイント』(英語教育21世紀叢書) 大修館書店。  
 檜葉みつ子 (2008) 1分間チャット&スピーチミニディベート28 明治図書  
 渡辺治行ほか (2010) 4技能を高めるコミュニケーションワーク37 明治図書  
 卯城祐司 (2011) 英語で英語を読む授業 研究社  
 卯城祐司 (2012) 英語リーディングテストの考え方と作り方 研究社  
 田中正道 (1999) 伝達意欲を高めるテストと評価 教育出版  
 高橋正夫 (2004) 実践的コミュニケーションの指導 大修館書店  
 小林良裕 (2011) Book1 高校生のための初めての英語ディベート  
 小林良裕 (2015) Book4 英語ディベート練習ハンドブック[即興型]  
 安藤香織ほか (2014) 実践アカデミックディベート 批判的思考力を鍛える  
 松本茂 (2014) 頭を鍛えるディベート入門  
 松本道弘 (2010) 図解 ディベート入門 中経出版  
 谷口忠大 (2014) ビブリオバトルを楽しもう ゲームで広がる読書の輪 さ・え・ら書房  
 Pros and Cons Discussing Today's controversial Issues Ichizo Ueda ほか  
 Pros and Cons A debater's Handbook Debbie Newman ほか  
 ディベート研究会用 ディベートノート 鹿児島県高等学校教育研究会英語部会 ディベート部  
 高知県教育センター  
<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310308/letsspeakenglish.html>  
 愛知県総合教育センター  
<http://www.apec.aichi-c.ed.jp/shoko/kyouka/h20task/part3top.html>  
 岩手日報社 (記事の提供: N I E)

### 3 新聞スクラップ

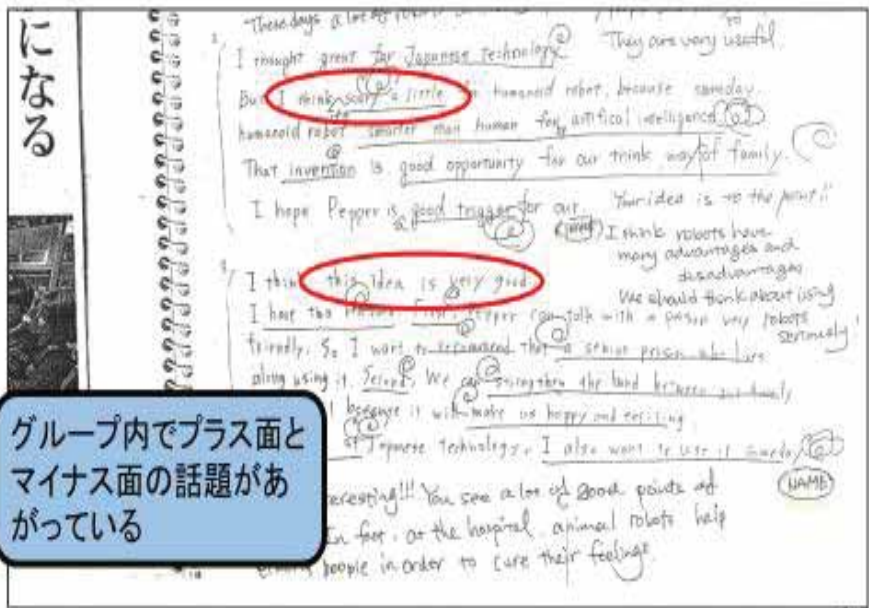
対象は2015～2016年度の2年次、3年次の生徒で通年の活動である。4人で1つのグループとなり、新聞記事に対して要約とコメントを付ける活動である。3年次では2部構成にしており、前期は他者の意見も加味しながら自分の意見を表現する活動とし、後期はディベートを見据えて、紙上ディベートの形式とし、英語ディベート活動へつながるように位置づけをした。生徒に付けた力として、コミュニケーション能力の土台となる、思考力・判断力・表現力・物事を批判的に見る力を意識した。また、小論文などの進路指導・キャリア指導の視点も含めてこの活動を行った。

新聞スクラップの方法は以下の通りである。(発表時のパワーポイント資料による)



実際のスクラップは以下の通りである。(発表時のパワーポイント資料による)

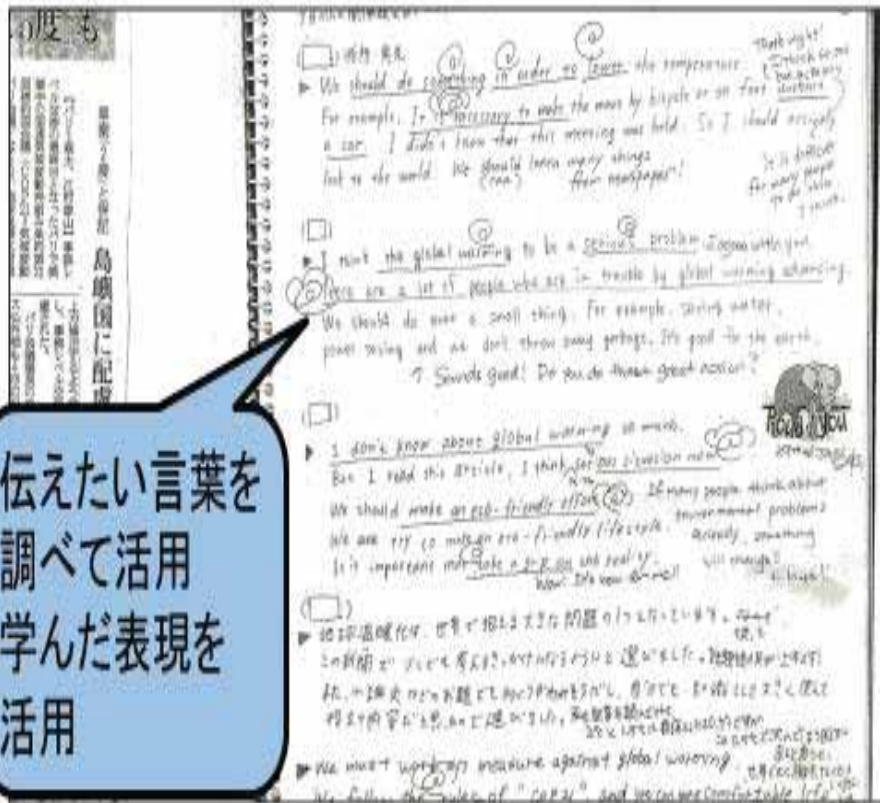
AIのロボットが家族になり得るのかという記事に対するコメント



グループ内でプラス面とマイナス面の話題があがっている

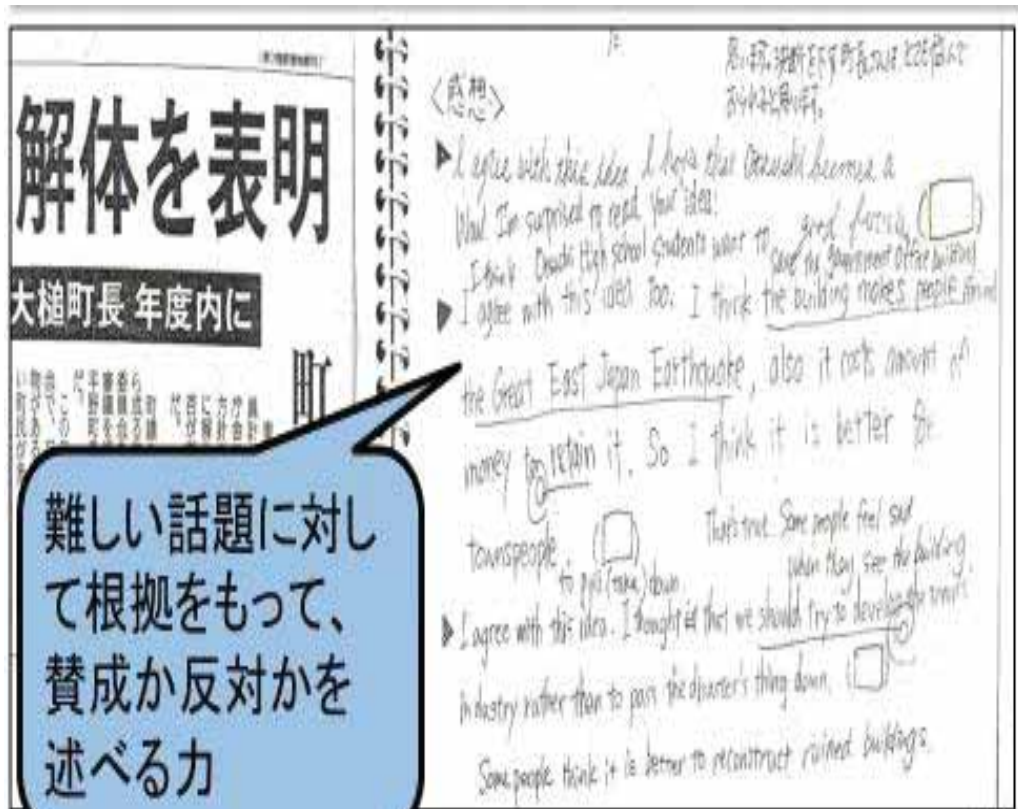
授業内で学習した単語や文法事項、構文を「使いたい」から使うという状況につながっている。訂正の赤ペンを入れるのではなく、主体的に英語を使っている場面に○をつけてたくさんつけるように意識をした。

伝えたい言葉を調べて活用  
学んだ表現を活用



大槌町の旧役場を解体することへの是非についても、デリケートな問題ながらも、根拠を挙げながら、紙面で意見交換が行われている。

難しい話題に対して根拠をもって、賛成か反対かを述べる力




#### 4 ピクチャーカードを用いたスピーキングとライティングを連動させた表現活動

対象は 2017 年度の 3 年次の文理進学コースの生徒である。英語の既習事項の定着度にはばらつきがあるものの、言語活動に意欲的に取り組む生徒が多い。入学当初はほとんどの生徒が英語が嫌い、苦手、わからないとの回答が多かった。2 年次より文理進学コースに所属しているが、4 月のスタディサポートの結果については英語 D ゾーン (D1→6 名、D2→2) が 8 名であった。約半数が英語に苦手意識を抱えている。しかし、根気強く英語の学習に取り組んできたことから、この 1 年で飛躍的に英語の能力を伸ばしてきた生徒たちである。授業においては、最初に毎回ランダムに配付されるピクチャーカードを用いて、その写真の内容を即興で英語で説明する活動である。この活動も、新聞スクラップ同様、学習した単語や文法事項、構文を織り交ぜながら、できるだけたくさん説明ができるように、机間指導をしながら一人一人に声を掛けながら行った。また、時には複数枚配付し、物語を作成してシェアする活動にしたり、4 コマ漫画を使ったり、身の回りのものを瞬時に英語で説明できるような活動にした。また、このことから、身近なものでも英語の学習に役立てることができることも実感してもらった。最後は必ずライティングの活動につなげることで、スピーキング力とライティング力の強化を図るとともに、**fluency** (流暢さ) と **accuracy** (正確さ) の両立も図るよう努めた。最終的にはプレゼンテーションにつながる活動となるように、生徒と到達目標を共有した。この活動の延長線上に、KP 法でのプレゼンテーションを行った。この活動でも **Can-Do** リストと **Rubric** は、全体共有を行い、目標を意識しながら活動した。最後のプレゼンテーションでは、東日本大震災を経験し、高校 3 年間、復興の力になれることを考えて学校生活を送ってきた生徒たちであり、進路もほぼ全員が復興に関わることを将来的には考えて選んでいることから、自分の将来と生まれ育ったまちの将来を組み合わせ、自分の思いを発信できるようにさせたいと思い、進学先に提出した志望理由を英語で語る、復興研究会で学んだことを語る、なども考えた。ただ、将来に希望や展望を持って、自分がどう関わっていけるのかを考えさせたいと思い、今回は「The future of Otsuchi / Kamaishi」とした。考えたプランが実現できる・できないに関わらず、まちへの思いを自由に語れるプレゼンにつながった。

ピクチャーカードを用いた活動の生徒のワークシートは以下の通りである。

4 月  
最初は話した内容を思い出しながら書く活動からスタート。


1 Speaking



2 Writing

Can you see this picture? This is hamburger.  
-get. It's comes from USA but it's so  
famous all over the world of course in Japan.  
I definitely agree with you.  
We can eat it everywhere, and anytime!

1 Speaking



2 Writing

Please look at this picture. This is a hamburger.  
It is not that I eat hamburger. So I want to eat  
hamburger?  
Sometimes I want to eat it!



10月

英検の二次試験問題を使って、スピーキング活動を、人を変えて3～4回行った後に、書く活動へ。スピーキングの段階で、お互いに表現を真似したり、単語を調べたりする様子が見られた。また、知らない・わからない語句については、簡単に説明をするなど、工夫が見られた。

ワークシート下部には、Rubric を載せており返却されるワークシートを見返し、どこを改善すればいいのかも考えながら、英文を作成する様子も見られた。

Writing Sheet



Your story should begin with this sentence: **One day three elderly people, two men and one woman, met at a coffee shop to talk about their mountain-climbing schedule.**

1. They are friends so they wanted make a good memory.  
2. But they are elderly people so they worried about a lost the way or mountain dangerous.  
3. She had a idea that is hire a good guide for us.  
4. On the day of climbing they could go mountain top a safely because of good guide.  
5. So they could good memorys and had a great a time.

6. She said "thank you for your help" for him and two men were happy because they could see a beautiful view from mountain top.

訂正欄(Rubric)  
文法点: A (1点, 間違いない) B 修正されずが正しい英文! C ちがった回答!  
内容点: A ポイントが入っています B もう少し、ポイントが入るといいかもしれません!  
分量点: A 7文以上できました B 5文できました C 3文できました  
【添削した英文であることが前提です】

これら1～4の活動のベースには「目の前の生徒の実態に即した指導」を意識した。このことを支えるものとして以下の3つを大事にしている。

- ① 生徒ができることと信じていること。
- ② Can-Do リストをしっかりと使い、系統立てて3年間のプランで指導をすること。
- ③ 学習指導要領を踏まえながら生徒の力量+αを常にモニターしながら Rubric とモデルの提示を行い、具体的な到達目標を共有して、生徒たちに、まずは自由に表現をしてもらい、褒めながら、個別に修正を加えていくことの繰り返しを根気強く行うこと。

上記の3つにより、生徒自らが成長すると感じている。入学時には英語が得意ではなかった生徒たちに、いかに英語を嫌いにさせることなく、学び続けさせる力をつけられるか、ということを目指して授業展開を行ってきた。

#### IV 研究のまとめ

##### 1 研究の成果

###### (1) 話す・聞く活動について

- ・スピーキングの活動を取り入れた最初の段階では即興では1分も話が続かなかったが、次第に2分、3分と関連した内容で話し続けられるようになった。
- ・英語で話をする事への抵抗感が少なくなった。

この背景には、間違ふことよりも、周りといろいろな考えをシェアできる方が楽しいと思うようになったことや、間違っていたとしても、伝えようとすれば伝わることに嬉しさを感じたことがあげられる。

- ・一方的な発信ではなく、相手の話を聞き、感想を述べたり、聞き返しや確認をしたり、追加情報を得るための質問ができるようになるなど、双方向のコミュニケーションが成立する場面が増えた。

(2) 書く活動について

- ・論理的な文章を書くことができるようになった。
- ・相手を意識した英文を書けるようになった。ただ、調べた単語を用いるのではなく、相手に伝わる英語で書くことや、伝わらなかった時の説明も考えられるようになった。

(3) 評価の一体化について

Can-Do リスト、Rubric を活用し、何のための活動なのかを共有することが大切だと感じている。また、文面だけでは伝わりきれない部分もあるため、B 段階の評価規準のモデルの提示も毎回行い、視覚的にも目標地点をイメージできるように努めた。このことで、自分のパフォーマンスも客観的に自己評価できるようになり、さらに上を目指すために、主体的に工夫を凝らす場面が増えた。

上述の活動における生徒の感想は以下のとおりである。(発表時のプレゼンテーション資料による)

2015年度、2016年度の生徒の感想より

- 読み手がいるという点から、自分で単語を調べ、相手に伝わりやすい英文を使うことを意識するようになった。
- 文章を読み取って要約したり、意見を英語で表現したりすることが少しできるようになった。
- 最初は、スクラップを毎週やるのは大変そうだし、嫌だと思っていた。でも、やってみるとニュースを知ることができ、他の人の意見も聞けるし、調べながら書くので楽しいし、先生のコメントも毎回楽しみでした。
- 活動の前は、できないと思っていたけど、やってみると充実して達成感がありました。

2017年度の生徒アンケート感想(4月と比べてできるようになったこと)

- グループでの活動や発表活動で力がついてきたと思う。
- 1枚の写真から、様々な話に広げたり、頭を使うから楽しく英語を勉強できている。
- 最初は話し続けることができなかったが、今は気づくとタイマーがなっていることがある。
- 言葉にして表現することで、伝え方も以前よりできるようになったし、どうにか伝えようという気持ちの面での変化があった。
- 文法や単語は少々間違っているが、英作文だから書けないとかではなく、積極的に書くようになった。
- 他の人の英語の使い方を学べる。

2 今後の課題

- (1) 発表時のデリバリーの工夫が必要であること。仕掛けを丁寧に考えること。
- (2) コミュニケーション活動を支えるための語彙力や文法力は、継続して強化する視点も必要であり、表現活動のみに偏らないバランスの工夫が必要であること。
- (3) ペアワークやグループワークなどの活動スタイルが苦手な生徒でも意欲的に活動に参加できるような工夫が必要であること。これは授業での指導を超えて、クラス経営をはじめ、すべての教育活動において、コミュニケーション能力の伸長を図ることが必要であると感ずる。